日常生活における風景発見に関する基礎的研究

熊本大学大学院　学生会員　○林　大貴　　熊本大学工学部　正会員　星野　裕司
熊本大学工学部　正会員　増山　晃太　　熊本大学大学院　学生会員　尾野　薫

１．はじめに

(1)背景

風景という言葉を聞いて、多くの人がまず想起するものは風光明媚な名所であろう。しかし、風景との出会い（以下、風景発見）とは果たして、限られた場所でのみ生じるといった、特別なものなのだろうか。

日本文芸の中に風景を捉えたものとして俳句がある。松尾芭蕉によって確立されたと言われる俳句は、物理的な情景の表現によって、その背後に漂う情感を語る。既存の句には、**図-1**に示すようにありふれた風景についても、数多く詠まれていることは言うまでもない。また、そのようなありふれた風景に対し、村上春樹は「使いみちのない風景[2]」という言葉によって述べている。使いみちはなく、けれども確かに生活を彩っている風景の存在を時代を超えて認めることができる。

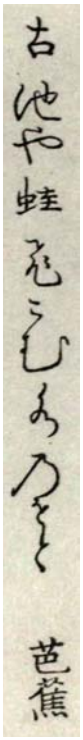

図-1　芭蕉の句[1]

従来、風景発見には知覚・認知・認識など多くの個人的・個別的要素が関わりを持つとされ、景観の分野でも研究が進められてきた[3]。しかし、その多くは状況・状態を制御することにより、為し得るものが多い。つまり、様々な状況・状態において行われる人間と自然の相互作用[4]の自由さを捉えきれていないと言える。

(2)目的

本研究は、風景発見は暮らしの豊かさに直結するという立場から、何気ない風景発見を捉える一手法を示すことを目的とする。

２．研究の視点と流れ

(1)研究の視点

本研究では、状況・状態をできる限り制御することなく風景発見を捉えるため、自発的に既になされた風景発見を対象とする。具体的には、近年における携帯電話の普及と付属カメラ機能の向上に着目し、携帯電話に保存されている、記録写真を除いた風景写真を対象にヒアリング調査を行う。

(2)研究の流れ

ヒアリング調査によって、身体の動き・視線の動き・周辺状況（以下、物理的要素）と、撮影時の感情・意識（以下、心理的要素）を抽出する。次に、物理的要素の図化を行い、それへの付加という形で心理的要素を紐付けする。それらを整理し分析することにより、日常生活における風景発見を捉える一手法を考察する。

３．ヒアリング調査

(1)調査手法

調査の際、対象者には携帯電話を持参してもらい、記録写真を除いた、日常生活の中で撮影した写真を提示してもらう。あらかじめ準備したヒアリングシートに沿って行った。質問項目を**表-1**に示す。なお、本手法は被験者の薄らいだ記憶を想起させるものであり、質問を投げかけながら進めることが望ましい[5]。

表-1　ヒアリング項目

項目	
基礎情報	撮影日時
	撮影場所
	撮影場所への訪問頻度
	撮影場所での撮影頻度
物理的要素	主な被写体
	撮影の前後を含めた身体・視線の動き
	周辺状況
心理的要素	撮影時に意識・こだわったもの・こと
	撮影時の感情
	写真のタイトル
その他	編集の有無
	その他補足

(2)調査結果

調査は、携帯電話で写真を撮り慣れているという点から、20代の学生を対象に行った。9人に調査を行い、32枚の写真とそれらに関する基礎情報・物理的・心理的要素を収集した。調査の概要を**表-2**に示す。

表-2　調査の概要

被験者	実施日(平成27年)	所要時間	枚数
A	8月17日(月)	30分程度	3枚
B	8月29日(金)	1時間半程度	4枚
C	9月12日(土)	1時間程度	5枚
D	11月4日(木)	30分程度	3枚
E	11月4日(水)	1時間程度	3枚
F	11月11日(水)	1時間程度	2枚
G	11月12日(木)	1時間程度	2枚
H	11月16日(月)	1時間程度	5枚
I	11月16日(月)	1時間程度	5枚

4．データの作成

(1)物理的要素の図化

ヒアリングから得られた、各写真に関する物理的要素をもとに図化を行った。凡例として、「撮影者」・「視線」・「移動」・「被写体」・「順序」・「遮蔽物」・「領域」の７つを用いる。一例を**図-2**に示す。なお、領域については、ヒアリングの中で「山道」や「歩道」など、被験者が言及したものをもとに表記する。これらの言及は、被験者の意識における領域を表現するものと捉え、各個人における風景発見の読み解きを表記できると考える。

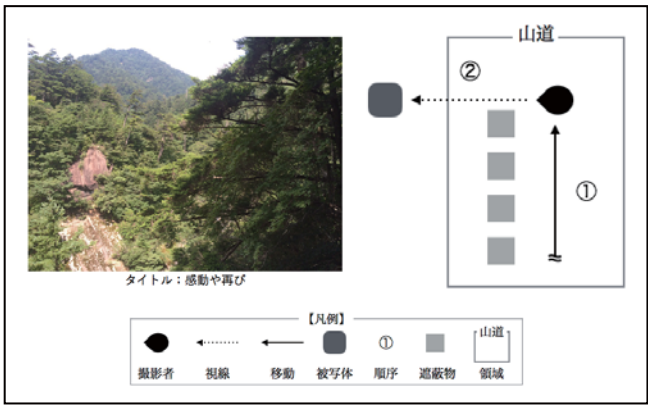

図-2　山道で撮影された写真と物理的要素の図化

(2)心理的要素の紐付け

物理的要素を図化したものに、心理的要素の紐付けを行った。凡例として、「意識」・「結びつき」・「過去への意識」・「未来への意識」の４つを用いる。一例を**図-3**に示す。なお、「意識」はヒアリングの中で言及されたものを表記し、「結びつき」はそれら意識の連関を表す。中には、「最近の天気」や「この後のドライブ」などといった、その場には、実際に存在していない過去・未来への言及も見られた。そのような場合は、「過去への意識」・「未来への意識」を用いて表記するものとする。

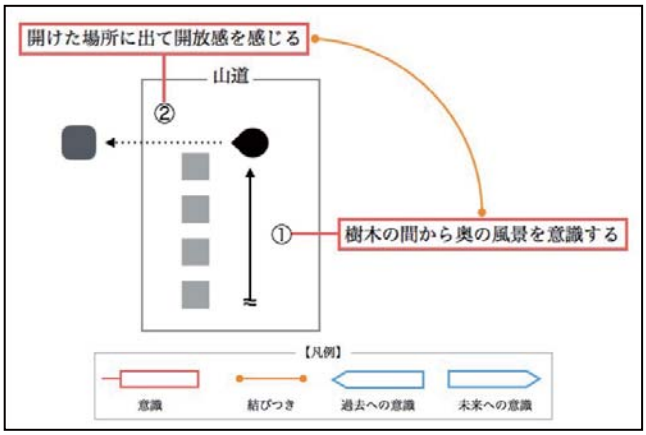

図-3　心理的要素の紐付け

5.分析

本章は、物理的要素と心理的要素それぞれに着目して整理・分析することを狙いとする。

(1)「領域」による整理（物理的要素）

a) 領域内視線・領域内移動

「領域」内で完結する「視線」・「移動」が見られ、それぞれを領域内視線・領域内移動と定義する。また、「領域」内での単一・複数の「視線」・「移動」が見られた。これは、均質な空間において、視線や身体の自由な移動が、風景発見に寄与することを捉えたものと考える。

b) 領域外視線・領域外移動

「領域」外に向かった「視線」・「移動」が見られ、それぞれを領域外視線・領域外移動と定義する。領域内同様、単一・複数の「視線」・「移動」が見られた。「領域」について、「賑やかなところから静かなところに出て」と言及している被験者もおり、差異を持った空間を跨いだ視線や身体の移動が、風景発見に寄与することを捉えたものと考える。

(2)「意識」による整理（心理的要素）

「意識」同士の「結びつき」が見られた。これは前節でも触れたように、視線や身体の移動によって、空間の質的な差異を認識していることを捉えたものと考える。また、「最近の天気」や「この後のドライブ」など、被験者の経験や将来など時間的な幅を持った「意識」の「結びつき」も見られた。これは、その場の印象だけでなく、記憶など極めて個人的な要素が影響していることを捉えたものと考える。

6．おわりに

本研究は、何気ない風景発見を捉える一手法を示すことを目的とするものである。今後は、物理的要素・心理的要素を横断的に分析していく必要がある。

【参考文献】

1)　芭蕉全図譜刊行会：芭蕉全図譜 全二冊(図版編)、岩波書店、1993
2)　村上春樹：使いみちのない風景、中公文庫、1998
3)　たとえば、前田明子ほか：イメージに着目した日常生活における風景認識に関する研究、景観・デザイン研究講演集、No.6、pp.154-159、2010　は学生が通学路という限定された風景について記述したレポート課題をもとに、日常生活における風景認識の特性を明らかにした。
4)　篠原修：景観用語辞典、彰国社、1998
5)　相良守次：記憶とは何か、岩波新書、p.2、1950